

2020年6月14日
聖霊降臨節第3主日

家庭礼拝のための
聖書・牧会祈禱・メッセージ



【 聖 書 】

ローマの信徒への手紙 15章1節～6節 (新約聖書 295頁)

【牧会祈禱】

命の源である神様

空の鳥を創り、野の花を創ってくださるあなたが、私を創って下さいました。私たちは自分の足りないところに目を奪われますが、あなたは私たちをお創りになったとき、喜んでくださったはずです。私たちの命の根底にあなたの喜びがあることを思い起こさせてください。

イエス様は他者の喜びのために生きておられました。その生き方に救われ、憧れたにもかかわらず、私たちは自分の満足、自分の都合を一番に考えてしまいます。小さく狭い範囲の心地よさに固執してしまう私たちをお赦しください。隣人のために、隣人の信仰のために私たちにもできることがあるはずです。私たちの行い、言葉、思いを神様が用いてくださいますように。

新型コロナウイルスによって、これまでの世界が崩れていくように感じます。仕事を失い困窮している人。病気によって大切な人を失った人。理不尽な扱いを受け、差別をされている人。この地は嘆きに満ちています。どうか、この世界を癒やしてください。私たちはこの時代の中で信仰を与えられています。神様が平和の計画を立ててくださっていることを信じて、忍耐することができますように。またこの状況の中で、信仰について、隣人と共に生きるすべについて、私がなすべきことについて、学ばせてください。

今、お家で療養している私たちの友を神様が癒やしてください。礼拝に集いたいという思いをもちながら家庭で礼拝している友を祝福してください。心や体が弱っている友を神様が励ましていてください。

このお祈りを主イエス・キリストのお名前を通して御前におささげいたします。

アーメン。

【メッセージ】

自分は弱いか、強いかという質問をされたら、多くの方が「弱い」と答えるのではないのでしょうか。それは自分の内面をよく知っているからでもあるでしょうし、そこには謙遜も含まれているかもしれません。イエス様も弱い人のそばにいてくださった方ですし、こ

の手紙の著者パウロも「力は弱さの中でこそ十分に発揮される」「弱い時にこそ強い」と言っています。キリスト教は弱さを肯定し、人間の弱さの中でこそ神様の力が働くのだと考えています。ですから、キリスト者は自分が弱いということを恥じないのでしょうか。

しかし、もしかすると私たちは自分の強さに無自覚なのかもしれません。おそらく自分が弱いと思っていますので、実は自分の内にある強さが相手を追い込んでいることに気がつかないのかもしれません。パウロは「わたしたち強い者」と言いました。もちろん私たちはいつも強い者であるとも言いきれませんが、誰もが弱いだけではない、強い者としてもあるのだと思うのです。

ここに出てくる「向上」とは、建物を造り上げるという意味の言葉です。自分が満足のいく自分を追いつめるのではない。それではいつまでたっても満足できないし、いつかそれが空しいことだと気がつきます。建物を造り上げるように、相手を信仰者として造り上げる。それがあなたの益となるのだとパウロは言います。もちろん、相手の信仰を造り上げるのは神様の仕事です。しかし、私たちが神様と共に相手を立て上げることを通して、キリスト者であることの喜びを得られるのです。

相手の信仰を造るお手伝いをするというのは、そう簡単なことではありません。しかし、そういったことは信仰に自身を持っている人に任せておけばよいという話ではないのです。そういう特別な人がいなくても、教会は教会ですし、教会とならねばなりません。強い人と弱い人とずっと区別されてきましたが、その差など神様からみればほんの些細なものです。信仰のためにこだわっていること、信仰のために大胆になること、その実績に執着するならば、それは人間の集まりと何が違うのでしょうか。見えるものが私たちの中心ではありません。ここは主イエスの教会であり、神様の教会なのです。そうであるならば、私たちは互いの今だけを見るのではなく、神様がこれから建て上げる姿を信じていくことができるのではないのでしょうか。

「あなたをそしめる者のそしりが、わたしにふりかかった」は詩編の引用です。誤解、批判、非難、失望、他者からそれらを受けることは私たちにとって耐えがたい苦痛です。眠れなくなるほど、生きるのがいやになるほどのことです。しかし、主はそれらを代わりに引き受けてくださっています。私が受けるはずの厳しい失望の言葉も、胸をえぐるような非難も十字架のイエス様が「引き受けた」とおっしゃってください。十字架のイエス様が、「あなたが受けるそしりの辛さは私が十分に知っている。そして私が受け取っている」と、おっしゃるのです。

そうやって主イエスが背負ってくださったのは、私たちが隣人の重荷を背負うためです。聖書から学んだのは、神が私たちに限りなく忍耐してくださっていることであり、神が私たちをどこまでも慰めようとしておられることです。その神が私たちに主イエスと同じ思いを抱かせてくださいます。他者のために生きる幸いを教えてくださいます。

私たちは性格も、習慣も違います。教会から離れれば、全く別の生活になる私たちです。しかし、主イエスという一点で私たちは同じなのです。共に生きるために主イエスが重荷を負ってくれた、主イエスが赦してくださったという誰にも変えることのできない共通点があります。だからこそ違う私たちがひとつになって神をたたえることができるのです。

隣人は批判しあうために出会ったのではありません。それは教会に限らず、家庭でも、職場でもそうかもしれません。これから出ていくところの方が、信仰を建て上げる場としてはより難しいでしょう。しかし、私たちは主とともに隣人を建て、それゆえに私自身をも建てていただける、そのような信仰に入っているのです。